

公式のクラスとして開催

米国コロラド州ボルダーを本拠地とする、**ロルフアー**TM養成の教育機関**Rolf Institute**[®]では、認定後さらにスキルを向上させるためのプログラムが継続して提供されている。

一昨年、Rolf Instituteの教授会で披露した私のセッションに共感し、強い関心を持った同僚に対して、昨年3日間を使って筆者の発展させた**イールド・ワーク**を紹介した。その後このワークに対する関心が徐々に高まり、今回は**ロルフイング・コミュニティ**全体に応募範囲を広げ、継続教育の単位取得を伴う公式のクラスとして開催が決定した。

サンタクルーズへ

今年は、昨年までの開催地**アリゾナ州フェニックス**から**カリフォルニア州サンタクルーズ**に場所を移す。ここは**恩師**キャロル・アグネス先生のお膝元。リベラルで革新的といわれるこの地は、最寄りの**サンノゼ空港**から車で約1時間とアクセスもよく、成田からの直行便があるのもうれしい。このサンノゼ空港では、他の米国の空港でよく遭遇する怠慢で感じの悪い入国審査と違って、嫌な気持ちにさせられることもなく、気持ちよく入国できた。この時期は**イースター祭**と重なっているため、家族連れの観光客も目立つ。

クラス初日

会場は、郊外にあるスブドゥ・センター。自然に囲まれた立地で**クラスルーム**は広くて快適だ。認定後間もない若手から、キャリア30年超えの先輩まで幅広い層の**ロルフアー**が全米各地から18名集まった。昨年に引き続き**メアリー・ポンド**先生も参加されていて、自己紹介で「私は、ヒロの大ファンなの」と付

ロルフアー、今度はカリフォルニアへ！

ロルフイング追求記。

パート3

ロルフアーの田畑さんから編集部へメールが。

「サンタクルーズでワークショップを行ってきました」

すでに来年に続編も決定していて、かなりの成功だった様子。

今回のセッション、仲間たちの反響は？

文 ● 田畑浩良

illustration by Yuri Mizutani

け加え、緊張ぎみの自分を和ませてくれた。

ここで紹介する**イールド・ワーク**と呼んでいる手法には2つの柱がある。1つは**施術者側の知覚・意識の向け方**を重視すること、2つ目は、**培養細胞の原初的な振る舞い**に倣う点にある。

まず、**施術側の意識の向け方**について実際に**クライアント**にどんな影響が及び、間合いがいかに重要を示す**デモンストレーション**から開始する。受け手となってくれた**アンモ**しっかり変化してまずまずの出だし。

ところが、実際の結果を目的の当たりにも、知識での解釈が追いつかないのか、質疑応答は過熱気味。体験が十分に伴わない段階での**ディスカッション**には実りがないので早く実習に移行したいが、なかなか收拾がつかない。そこへ、**メアリー・ポンド**先生が「このワークは、例えると、絵の具をキャンバスに投げつけて、それでどんな作品になるかを見る、**アート**」なのよ、それが私の印象」とコメント。すると自然に討論に向かう流れが修正され、すかさず次の**デモ**に進むことができた。身体に広がりを引き出すためのワーク、触れる時間は数秒だが、**施術者が意識の向け方**を変えるだけで、受け手の呼吸は深く長い**周期**へとシフトする。それに共振するかのよ

うに、クラス全体が次第に落ち着いていくのを感じる。

クラスの流れが脇道に逸れないように、このワークに共感する仲間がサポートしてくれるのは本当にありがたい。

不思議なことに**実習の準備中**、突然**マッサ**ー**ジテーブル**が大破。セッティングが甘い状態で人が乗ったために、バキッと台が真つ二つに折れてしまった。けが人はなくほっとしたが、台の持ち主は**メアリー・ポンド**先生。LAからわざわざドライブして運んだ自分の台なのに「早いこと捨てちゃってね」という、そのこだわりのなさはなんと清々しい。さすがです。たぶん何かの厄払いだった出来事に違いない。なんとか初日を楽しめた。

Day 2

今日の**デモ**のモデル**クライアント**に名乗り出てくれたのは、**教員**でもある**ベサニー**。一昨年の私の**デモ**を観て、同じく**教員**で、**ご主人**の**レアリー**と仲良く参加してくれた。

今回の**デモ**は、**諸々の状況**を考慮して、**普**段は別々に分けておこなっている**2回**の**セッション**の内容を**1回**分の**デモ・セッション**で示すことにした。無理な設定ということもあり、**残念**ながら**ベサニー**との**セッション**は会



心の出来とはいえなかった。
しかし、参加生同士の実習を観察すると、意外にも全体にいいワークをしていたのが印象的だった。パツチリ決まったデモ・セッションを見せられなくても、これはこれでありなのかもしれない。

Day 3

昨日のデモがあまりばつとらなかったこともあって、朝の気分はやや低め。クラスが始まる前に、あるキャリアの長いロルフアーに(ちょっと無理して)話しかけたところ、「このワークは私のやること (job) ではないとわかったの!」という正直なコメントが返ってきた。何十年も圧力をしつかりかけて筋膜リリース中心にセッションを組み立ててきた大先輩にとって、ここで習う方法にはかなりの抵抗があってもおかしくはない。万人に効く方法がないのと同じように、万人に適した施術法はない。どのツールを選択するかは、それぞれのロルフアーに委ねられている。私も習った技術のうち採用しているもののほうが実際少ない。

さて、気持ちを切り替え、若手のグレンに第6セッションのデモ・セッション。仙骨を自由化し脊柱の連続性を引き出す内容だ。長年肩の不調に悩まされた彼は、早くからモデルクライアントに立候補してくれていた。記憶に残っていないような段階で受けたデモであったとしても、その痕跡は何らかの形で結合組織に記憶され、皮膚も何かを表現している。明らかに健全な色や触感とは異なる場所を見つけ、そこにわずかでも動きが回復すると全体に影響を与えることができる。このデモでは、皮膚情報を手がかりに、触れた場所と全体がシンクロしてくるのを待つ。見守っている間に、自発的に小さな痙攣のような



上/デモ中の田畑さん。このセッションを終えると、自然に周囲から拍手が起こった。左/集合写真。参加生の多くが、来年この続きのクラスを希望してくれている。



反応が続く、やがてそれが収まるまで待ちながら、全体が一体となる状態を引き出す。途中、肩関節が比較的大きく再配置される変化も観察された。

身体をゆっくり起こして、歩いてもらうと彼の口から「すばらしい (incredible)！」という言葉が漏れる。表情は満ち足りている。囚われた状態から、心身が自由になる瞬間は、全体がやや光ったように明るくなり、独特の静けさが全体を包みこむ。この存在状態を味わってもらった時間をしばらくとってから、お互い礼をいってセッションを終えると、自然に周囲から拍手が起こった。後から聞いたのだが、グレンは、この日を「人生で最高の日」と表現したそうである。朝の低めの気分とは一変して充実感とともに3日目を終えることができた。

この日は実習中に教員の一人と有意義なやりとりもあった。

「セッションをしているときに、まれにその場を逃げ出したい衝動にかられることがある」という。筆者にも同じ体験があるので、「逃げ出したいと感じた場合、その時その場所を扱うべきタイミングではないのではない

か、つまりその場を離れたというあなたの衝動は正しかったのではないだろうか」と答えた。一般に援助職は、基本的に受け手をできるだけサポートしたいと思っているため、何かを見つけた場合にそれをあえて扱わないことや、予め決められていることをしないことには抵抗があるかもしれない。

しかし、人生には必要なタイミングでその時進めるべきプロセスと進むべき方向性があるとすれば、わかっているにもかかわらずではない場所とタイミングがあるに違いない。それはきつと施術側の身体感覚を通して感知できるに違いない。

仲間とこうした感覚を共有することで、何となくいままで感じていたり頭で思っていたことが腑に落ちる、貴重な時間だ。

Day 4

最終日は、シアトルの大学で鍼灸を教えているサラがモデルクライアント。ロルフアーで最も特徴的とされる7回目、口腔や鼻

腔空間を扱うが、従来のクラスで紹介される方法よりはるかに繊細なタッチで行うデモ。的確なフィードバックと共に満足のいくセッションに再び拍手が起きる。デモに対して質問も少なく、すんなり実習に入っていく流れは、初日とは明らかに違う。

すべての実習を終え、参加生の身体の状態をチェックする。みな調子はいいとの感想にほっとする。

今回のクラスは、恩師であるキャロル・アグネス先生がコーディネイトを引き受けてくださり、開催中も全面的なアシストのお陰で無事クラスを終えることができた。感謝! 先生の粋な計らいで用意された日本酒で乾杯して閉会。

参加生の多くが、来年この続きのクラスを希望してくれているようで、次回は統合セッションに関する内容にする予定。

最後に、うれしい知らせとして今回参加してくれたグレンとポールが、秋に東京で開催される上級ロルフアー認定トレーニングに申し込んだという。彼らは、今回のクラスにインスパイアされ、キャロルと私が講師陣として加わることを知って参加を決めたという。日本での彼らとの再会が楽しみである。

※1 Rolf Institute®: ロルフアー®、ロルフアー™、ロルフアー・ムーブメント™は、Rolf Institute®の登録商標。 ※2 イールド・ワーク: イールドという原初的な動きは、母胎に対して自身を委ねることである。その動きは、試験管内の培養細胞の振る舞いにも観察され、まず足場にしっかり接地する動きと、さらに周囲に対して広がる動きの2つが、生存と増殖のために必須となる。細胞の集合体としての身体に対して、この2つの動きが引き出されるようにタッチを用いることによって、全体に広がりや動きが回復する。この原初的な動きが出てくるためには、周囲が安全であると身体が認識することが前提となる。その変容の場を形成するには、周囲の一部としての施術者の内的意識状態が、鍵を握っている。プラクティショナーの存在状態は無意識に設定されるが、どのような意識状態が適しているのかを、このイールド・ワークでは意識的に注意するポイントを明確にしている。 ※3 キャロル・アグネス先生: Rolf Institute®教員(ムーブメントとロルフアー部門)、クレオセイクリル・バイオダイナミクスの教師としても世界中で活躍。日本で最初のPhase2のロルフアートレーニングで来日して以来、日本のロルフアー教育に多大なる貢献をしている。http://holographictouch.com ※4 メアリー・ボンド: Rolf Institute®教員(ムーブメント部門)としてLAを中心に活動する世界的にも著名なムーブメント教師。全米各地やオーストラリアでワークショップを開催。http://healyourposture.com ※5 上級ロルフアー認定トレーニング: 日本では初の開催となる。期間中、格安でロルフアーからワークを受けられるモデルクライアントを募集。日本ロルフアー協会(www.rolfing.or.jp)からお申し込みください。

田畑 浩良

たはた・ひろよし ●ロルフアー。翰林原生物化学研究所の연구원を経て、1998年米国 Rolf Institute®によってロルフアー™として認定される。動的感覚を伴った繊細なタッチで行う個人セッションを中心に活動。2009年から、ムーブメント部門のRolf Institute®の教員として、継続教育に携わる。福島でのキッズ・ロルフアーや一般向けワークショップも開催中。www.rolfing.com

